令和６年度　第 76 回全日制卒業証書授与式式辞

厳しかった冬の寒さも日ごと和らぎ、校内の木々も新たに巡り来る春を迎えるかのように枝を広げ、木の芽を膨らませた今日の佳き日、PTA 会長　篠原裕和様、同窓会長　井原和彦様、愛媛県議会議員　石川剛様をはじめ、御来賓並びに保護者の御臨席を賜り、令和六年度愛媛県立川之江高等学校全日制課程第七十六回卒業証書授与式が挙行できますことは、卒業生をはじめ在校生並びに教職員一同の大きな喜びであり、厚く御礼申し上げます。
ただ今、めでたく卒業証書を授与された百六十一名の皆さん、御卒業おめでとうございます。本校における三年間の修学に対して重ねてきた皆さんの努力に敬意を表するところであります。また、この日を待ち望んでこられました保護者の皆様に対しまして、心よりお喜びを申し上げます。私自身にとりましても、入学時よりこの川之江高校で同じ時を過ごした皆さんの立派に成長した姿をこの場から見ることができ、うれしい気持ちで一杯です。
振り返りますと、皆さんの中学校生活の後半から、新型コロナウイルスのまん延が脅威となり、学校現場にも大きな影響を及ぼしました。楽しみにしていた学校行事の縮小や部活動の制限、さらには各種大会の中止など、やりきれなさや喪失感を埋めるのは簡単ではなかったと思います。悔しさを胸の内にしまい、前を向くという強さを発揮するとともに、当たり前が当たり前ではなく、ありがたいことだったということに気付き、感謝することやお互いを気遣い、思いやることの大切さについても学ぶことができたのではないでしょうか。ようやく一昨年五月には、感染症法上の位置付けが緩和されたことで、皆さんの高校生活の後半が充実したものとなり、かけがえのない思い出を心に刻む機会が増えたことは我々教職員にとっても幸せなことでした。
さて、三年前の入学にあたり、緊張した面持ちの皆さんに私からお願いしたことを覚えているでしょうか。その内容は始業式や終業式でも皆さんに一貫して伝えてきたところです。入学式でお話したことを再度取り上げ、私から皆さんへの高校最後のお願いといたします。
日本人として二十八人目のノーベル賞を受賞した現在の四国中央市の大先輩で旧新宮村出身の真鍋淑郎さんは、記者会見で「自分に興味があって得意なことをやれば、一生幸せに暮らすことができる。」と「好奇心」を持って取り組むことの大切さについて話されていました。私自身の今までの教員生活においても「好奇心」旺盛な生徒たちが勉強や運動・文化活動等において驚異的に成長した姿を見てきました。そうした生徒たちに共通していたのが、「なぜ？どうして？」という思いを口にしていたことです。「好奇心」を持って知ろうとする気持ちが自らを成長させる原動力になっていたことは間違いないでしょう。私は「好奇心」とは自ら学ぶ力にほかならないと考えています。「なぜ？どうして？」と自分の頭で考えないで、すぐに答えを求めることが習慣になれば、常に知識のかけらを求めて情報の海を漂流するだけの人間になってしまうのではないでしょうか。
もちろん「好奇心」を持っていろいろなことにチャレンジしても、必ずしも「成功」や「成就」、「達成」につながるとは限りません。「失敗」という結果に至る場合も少なくないでし

ょう。しかし、「好奇心」や「夢・希望」を持って新しいことや困難なことに果敢にチャレンジした結果、失敗に至ったとしても、その過程には大きな意味があると考えます。そこからは、同じ失敗を繰り返さないという強い思い、成功に導くための思考力や工夫、実践力が生まれてくるからです。つまり、より高い人間的な成長を目指す生き方が確立されてくるのです。日々の生活の中で「好奇心」や「夢・希望」を持って様々なことにチャレンジする気持ちの火を灯してください。そして、失敗を肯定的にとらえ、これを恐れず、何度も何度もチャレンジすることで、たくましさを身に付けていってください。そうした前向きな日々の繰り返しは、皆さん一人一人の人間力を磨き、人生の大きな宝物となるはずです。皆さんに繰り返して伝えてきたこのことをいつまでも大切にしてくれることを願っております。

話は変わりますが、今から約百六十年前の千八百六十七年、江戸幕府の十五代将軍徳川慶喜による大政奉還が行われ、いわゆる江戸時代が終焉を迎えました。徳川家康が江戸幕府を開いて以来、約二百七十年間にわたって日本の政治の中心であった江戸城（現在の皇居）。その江戸城が無血開城されたのは、薩摩藩出身の西郷隆盛と幕臣であった勝海舟の会談によるものであったということは皆さんもよく知っていることでしょう。しかし、その陰の立役者で最大の功労者であった山岡鉄舟のことは案外知られていません。山岡鉄舟が詠んだ歌を皆さんに紹介したいと思います。「晴れてよし　曇りてもよし　富士の山　もとの姿は変わらざりけり」

人生には晴れの日もあれば曇りの日もあり、場合によっては暴風雨の日もあります。つまり、いい時もあれば、悪い時もあるということです。晴れた日には、富士の山は霊峰富士と称えられ、その雄大な姿が多くの人たちを魅了しますが、曇りや雨の日には称賛されることは少ないかもしれません。しかし、富士の山は評価によって変わることなく、悠然と存在しています。世間の評価に、また周囲の言葉に惑わされることなく、飄々と受け止めて、己の信念を貫くことが大事だという覚悟を感じる歌ではないでしょうか。皆さんに伝えたいのは、「好奇心」や「夢・希望」という信念を持って、周囲に惑わされることなく、誠意を尽くして自分の信じた道を進んでいく、そして、新しいことにチャレンジしたり、一歩前に踏み出すということを常に心に留め、これからの人生を送ってほしいということです。この川之江の地に生をうけた朱子学者の尾藤二洲も「志の一事は自心に問て決すべし」と同じことを述べており、信念をもって前に踏み出すことの大切さを示してくれています。そういった姿勢で皆さんが今後の人生に挑んでいくことが、今まで皆さんの成長を支えていただいた保護者の皆様にとっても、皆さんと関わってきた我々教職員、そして、皆さんの力を待ち望んでいる地域社会にとっても、この上のない喜びとなるはずです。

卒業生の皆さんにとって、この川之江高校は「母校」であり、心の拠り所としての「ふるさと」であります。皆さんの成長に大きく関わった「母校」を、「ふるさと」を大切に思うとともに自分自身の人生をしっかり見つめて前向きな気持ちで歩みを進めてほしいと思っています。現代社会は予測困難な時代の途にあり、皆さんが歩むこれからの道は決して平坦なものばかりではありません。時に高い壁に行く手を阻まれるなど、閉塞感にさいなまれるこ

ともあるかもしれません。しかし、「希望（ゆめ）や好奇心、チャレンジする気持ち」を持ってたくましく、前向きに歩むことで、それらの壁を乗り越えることができるでしょう。
結びになりますが、保護者の皆様、お子様が心身ともにたくましく成長し、本校を卒業していく姿を目のあたりにして、様々な思い出に万感胸に迫るものがあることと存じます。お子様たちは、一人一人がこの三年間で大きく成長してくれました。これからも皆様の御期待に応えてくれるものと確信しております。
卒業生の皆さん、いよいよ旅立ちの時がやってきました。これからは、皆さん自身が、今まで支え、育ててもらったふるさと・地域社会の一員として、後進を支えていく側に立ちます。今後は本校同窓会の一員として、後輩たちを応援してくれることを願っております。そして、本校で培った自主・自律の精神で、よりよい地域づくりに貢献しつつ、力強く、そしてたくましく人生を生き抜いてください。名残は尽きませんが、巣立ちゆく皆さんの御健勝、御多幸と一層の御活躍を心から祈念し、式辞といたします。
令和七年三月一日
愛媛県立川之江高等学校長　松木　義明